

温古知新②〇 南総里見八犬伝 1 〇 1
笑顔礼讃西東

歯車俳句会様(東京都国立市) 2 〇 3

爽樹 新年俳句大会(埼玉県・川越市) 3 〇 4

田澤 宏様(新潟県・新潟市) 5

投稿作品 6 〇 10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(バレンタインの思い出は?) 11 〇 13

新潟ぶらり／新潟県立植物園 13

お客様の「リレーエッセイ」 須藤昭子様 14

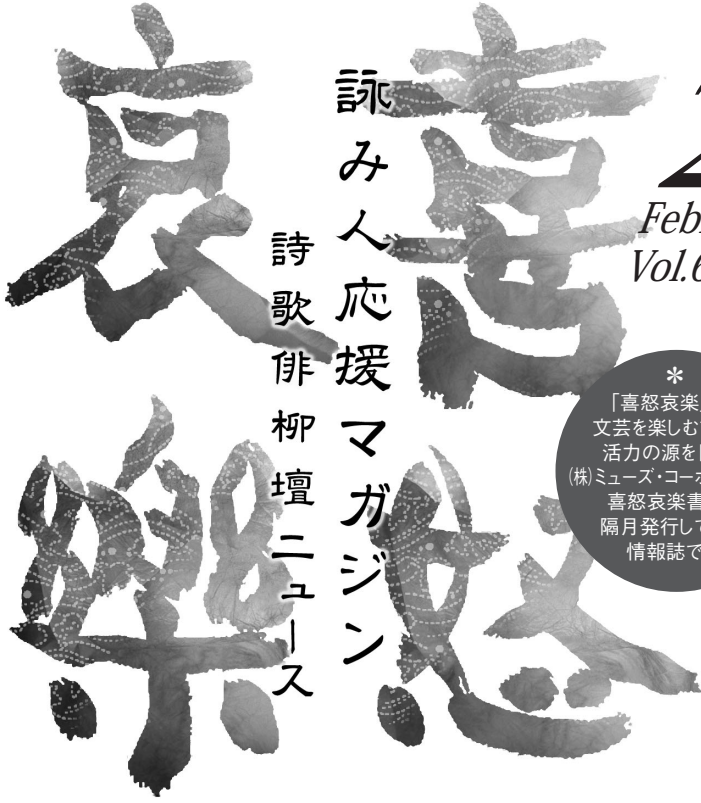
二ユースあれこれ 15
詠み人の「リレーエッセイ」 歌人 山田 航様 16

2
February
Vol.66

*
「喜怒哀楽」は、
文芸を楽しむ方々の
活力の源を目指し
(株)ミュージック・コーポレーション
喜怒哀楽書房が
隔月発行している
情報誌です。

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇 ニュース



温古知新②〇

「南総里見八犬伝」1

第20回を迎える「温古知新」。今回からは、「南総里見八犬伝」のあらすじをご紹介します。

「南総里見八犬伝」は、文化11年(一八一四)〜天保13年(一八四二)の28年にわたって執筆する大長編小説です。稗史七法則という小説理論や、勸善懲惡・因果応報の思想が見られます。後期読本の代表作です。様々な映画、ドラマなどにもなっているので、ご存じの方も多いでしょう。そのあらすじは……。

時は嘉吉元年(一四四一)。結城合戦で敗れ安房に落ち延びた里見義実(よしみの)は、滝田城主神余光弘(ひかる)を謀殺した逆臣山下定包(さだたかね)を、神余旧臣・金碗(かねわん)八郎の協力を得て討ちました。義実(よしみの)は定包の妻玉梓(たまずき)の命を助けるよう言いますが、八郎に諫められその言葉を翻します。玉梓は「里見の子孫を畜生道に落とし、煩惱の犬にしてやる」と呪詛の言葉を残して斬首されてしまいました。

時は過ぎ長禄元年(一四五七)。里見領の飢饉に乘じ、隣領館山の安西景連(あにしけいれん)が攻め込みま

す。落城を目前にした義実(よしみの)は、飼犬(やし)の八房(やっふさ)に「景連の首を取ってきたら娘の伏姫(ふせひめ)を与える」と約束をしようとした。すると、八房は景連の首を持って戻ります。義実(よしみの)は先の言葉を冗談とし他の褒美(ほめい)を与えようと思いましたが、八房はそれに目もくれず、伏姫(ふせひめ)を求めました。伏姫(ふせひめ)は君主(みすく)が言葉を翻(か)すことの不可(ふか)を説き、八房(やっふさ)を伴(とも)つて富山(とみやま)の山中(やま)に籠(こ)ります。

富山(とみやま)で伏姫(ふせひめ)はひたすらに読経(よみぎやう)の日々(ひび)を過ごし、八房(やっふさ)に肉體(にくたい)の交わり(まじわり)を許(ゆる)しませんでした。その翌年(つぎねん)、伏姫(ふせひめ)は山中(やま)で出会(であ)った仙童(せんどう)に、八房(やっふさ)が玉梓(たまずき)の呪詛(のろ)を負(お)っていたこと、読経(よみぎやう)の功德(とくどく)によりその怨念(うらみ)は解消(かいぎょう)されたものの八房(やっふさ)の氣(き)を受けて子を宿(よ)めたことが告(つ)げられます。懷妊(わいにん)を恥(かたじけなく)じた伏姫(ふせひめ)は、ちょうど富山(とみやま)に入った金碗(かねわん)大輔(だいすけ)(八郎(はちろう)の子(こ))・里見義実(よしみの)の前(まへ)で割腹(わりはら)し、胎内(たない)に犬(いぬ)の子(こ)がないことを証明(しょうめい)しました。その傷口(きずぐち)からは白く輝(かがや)く不思議(ふしぎ)な光(ひかり)が流(なが)れ出(で)て、姫(ひめ)の数珠(ずしゆ)を空中(くわうちゆう)に運び、仁義(にぎぎ)八行(はちぎょう)の文字(もじ)が記(し)された八(はち)つ(つ)の大玉(おほたま)が飛散(とびち)したのです。義実(よしみの)は後(あと)を追(お)い自害(じがい)しようとした大輔(だいすけ)を留(とど)め、大輔(だいすけ)は僧(そう)となり、「犬(いぬ)」の字(じ)を崩(たふ)した、大(おほ)と名乗(な)り、八方(はちかた)に散(ち)った玉(たま)を求(もと)める旅(たび)に出(で)るのです。

……と、今回は物語(ものがたり)の発端部(はつたんぶ)のあらすじ(あらすじ)をご紹介します。28年(にじゅうはちねん)もかかって書(か)かれた超大作(すうだいさく)。果た(果た)して何回(なんかい)であらすじ(あらすじ)をご紹介しますのか!? (こちらも乞(こ)うご期待(きたい)! (あは))

(古川久美子)

歯車俳句会

代表 前田弘様

(東京都・国立市)

昨年12月15日、東京・外神田にある現代俳句協会で行われた「歯車俳句会」の句会にお邪魔しました。

代表の前田弘さまは、現在、現代俳句協会の幹事長という要職にあられるご多用の身。どんな方かと恐る恐るお待ちすると、スニーカーにリュックという軽装で「どうも」とご登場。気さくで朗らかなご様子に一安心する。以前、当社でお手伝いしていた俳誌「ぼお」(2004年8月「喜怒哀楽15号」掲載)にいらした、同じく現代俳句協会の名誉会員、大坪重治さまや田中いずささまもいらして、懐かしい8年余来の再会に喜びつつ、会は始まりました。



▲隔月刊の「歯車」1月349号

「歯車」は高校生を主体とした俳句研究誌「風」が改称した雑誌。代表の前田さまは創立会員で、北海道の高校在学中から投稿。その後、指導者に鈴木石夫氏を迎え師事。平成18年6

月より代表をつとめていらっしゃいます。本日は女性10名、男性5名の15名の出席。当季雑詠5句提出、8句選のうち1句を特選として選びます。

数え日やきょうもあしたも所用あり
所用でいただいた。「所用」と言うと、それ以上は誰も突っ込んでこない便利な言葉／具体的に言わないでほしかったところがおもしろい。

前田：でもね、師走だから所用があるのは当たり前。

蓑虫の顔あるかないかが問題

蓑虫に顔があるかないか、それを俳句にしたところがすごい。

前田：そう、それが大問題だね(笑)。ぜひ調べて下さい。

拳ひらくとふくよかな距離冬芽

「ふくよかな距離」がいい／堅い冬芽に対して、冬芽が開いたときをふくよかな距離だと言っている。「拳をひらく」と「ふくよかな距離」がいずれも冬芽にかかっている、柔らかく優しく言いかけてくる。

前田：拳を開くとふくよかな距離だと。グーだと柔らかくないが、開くことにより人と人との心理的な距離が柔

らかくなりますよ、それを映像化すると冬芽のようなものですよ、ということ。ふくよかな距離を映像化したのが冬芽だという、非常に巧みな句。

山が山に従って大黃落

大きな山があり、その大きな山ももつと大きな山に従って枯れていくという状況をとらえている／季節のざわめき、移りゆく気配が大きく詠われている。

前田：大きな山。はるかなる山から順々に大黃落、「従って」が生きてくる。

大根の白ほど清浄にはなれず

白が印象に残った／家の前の畑にある大根、抜いたときは泥だらけだが、洗うとこんなにもと思うくらい清浄に。人間もこのようになれるものかと。

前田：悪くいうとキザだね(笑)。

はふはふおでん言葉を探す二人かな

熱いおでんに気をとられ、瞬間的に沈黙があり何を話そうかなと。「ふーふー」じゃなくて「はふはふ」だと、いろいろ想像させてユーモラス。

前田：「はふはふ」が面白い。言葉を探すから「はふはふ」。ただ熱いと「ふーふー」。お互い気づまりなんでしょう、それで言葉を探している状態を「はふはふ」と擬音化した。

綿虫を掴む無数の我がいて

見ると捕まえたくなる綿虫の一つひとつが自分であり、虫の数だけ自分がいるのではないかという客観的なまなざし。

前田：ずっと現われてはずっと消え、掴むことができなかつた。幾度も掴もうとした自分、少年時代の無数の体験とが重なる。



午後四時の日暮の句い十二月

午後四時と限定しているところがおもしろい。「日暮の句い」が巧み／四時と日暮れがだぶるが、暮れかかり、でも昼間も残っている微妙な時間を午後四時ととらえ、それが今頃の時間だといっている。

前田：非常に上手い句。11月だったらまだ明るい、12月の5時は真っ暗、その前にもう日暮れの句いがあると。水原秋桜子流に言えば「自然の真」であり「文芸上の真」であり、両方を兼ね備えている。

山茶花はしゃべりかけない賑わい

山茶花は薔薇や椿と違ってみんなが寄ってくるような花ではないが、「賑わい」で花の数が多いことを詠んだ。

山茶花は薔薇や椿と違ってみんなが寄ってくるような花ではないが、「賑わい」で花の数が多いことを詠んだ。

笑顔礼讃西東



▲忘年会は会場の関係で次回に…残念!

前田：「しゃべりかけない賑わい」が、山茶花をうまくとらえている。いちよう散る今ささやきかうなずきか 感覚としてわかるような気がする。

前田：今、目の前の銀杏の散りざまを、ささやきながら散っているのだから、うなずきながら散っているのだからか と見ているおもしろい句。

老人は海茶の花の葉あふれ

「老人は海」という言葉にひかれた／「老人は海」に老人の持つ得体のしれない大きさを感じた。茶の花は慎ましうに咲いているが、ある時期になると芯の方が花びらからはみだし大きく出てくる。この句には力が溢れていると感じた。

前田：「老人と海」ではなく「老人は海」は斬新だと思ったが、下との関係性がわからず不思議な句だと感じた。

籠りいて又白菜を刻みけり
寒いから、今日も家から出ずまた白菜を刻んで食べた、というコミカルで生活が見える句。

前田：「また白菜を」はわかるが「籠りいて」が別の言葉だと、違うシーンができるので、完成していない感じがする。でも気の毒だね、毎日白菜で(笑)。誰の句？

はい、豊かな暮しをしている悦子です(笑)。

雪吊りにあたたかさうな雪が降る

「あたたかさうな雪」が意表をついた／雪吊りがあると、ゆったりとあたたかい感じがしてくる。

前田：あたたかさうな雪や、湿気のある重い雪だから雪吊りも必要。北海道は粉雪なので、雪吊りはない傘もささない(代表は北海道・北見出身)。

年の瀬を喜怒哀楽の顔走る

いろんな人の顔が走っていると見たところが、おもしろい／今日いらした木戸さんが喜怒哀楽書房の顔として頑張っているという挨拶句でもある。

前田：中7がうまい、ありそうでない句。挨拶句を越えてお見事。

重力が消えそれからの烏瓜

からからになった烏瓜、それでもずつとぶら下っている姿に、これからの厳しい冬を思った／青いうちは重力もあるが、次第に赤くなり、最後は中ががらんどろに。枯れて漂っている烏瓜とこれからの人生を重ね合せている／17文字です(ごい)を言っている／烏瓜のからからになって、くるくる回っている景は誰しも詠いたところ。「重力が消え」という非常にリアルな言葉

で詠んだところが有効。

前田：景としてはくだらないが、それを「重力が消えた」と、さもこういう風に詠ったところがすごい。

黄落は笑いころげるようにかな

新鮮に感じた／作者の持っている人生観の明るさに共感。嘆き悲しんで落ちていくのではなく、笑い転げるように終わっていくという気持ちがいい。

前田：かわった黄落だな、と(笑)。

初冬の少年クレパスのよう

自分も何十年前はこうだった(笑)／やわらかい感触と指で伸ばせるクレパス、それと初冬の少年の取り合わせ／少年をクレパスのよう、ととらえた感覚がいい。真夏の少年でも真冬の少年でもなく、初冬というところがデリケートで、字足らずだけど感覚が詩的ではらしい。

前田：すごいというより、懐かしい感じがした。

神様とどこかが違う木守柿

柿の木や動物を守るために、いくつか残してある木守柿。神のようになっているか／台所に大きい柿が置いてあり、神々しい柿色をしている。でも、どう考えても神様には思えないと、作者はきつと真面目に書いていると思う。

前田：おもしろい発想。誰かが木守柿は神様だよ、と言ったのでしようね。

トイレの神様を理解できるのは日本人だけだし、子守柿にどこか神様を感じているところがいい。

「何を入れても十二月

斬新な句。「」だけで上五が据えてあり「何を入れても十二月」が生き

ている／すごく頭のいい方だと思った(笑)／何を入れようかなと思った。

前田：見ようによつては、「」は読めないだろうとバカにされている気もするが、ちゃんと五七五になっている。

クリスマス読めても書けぬ燐寸かな (皆さん)ほんと、そう(笑)。

前田：書けないと言いがらちゃんと言っているところがにくいね。

あらあらかしことばかりに竜の玉

竜の玉の小さい青いかわいらしい存在そのものが、あらあらかしこところに隠れていたの、と、作者と竜の玉の会話が聞こえてきそうかわいらしい句。

前田：文末に使う「あらあらかし」を頭の挨拶にもつてきたのがおもしろい。

★「詩性が高く新鮮で飽きのこない俳句を希求する」というだけあって、わからないなりに、つい「ムムム」とうなつてしまうような句や、意味を理解すると「ああ、なるほど！」と感心してしまうレベルの高い句が続く会。代表の前田さまは「原因と結果のみ」「膨らみがない」などと、ニコニコしながら意外に歯に衣着せぬ感じでピシッとおっしゃるが、お人柄ゆえ全く嫌味がなく、「ほんと、そうですね」と素直に受け入れられる。常に笑いがあつて、独自性があつて、感性豊かな俳句に触れられる刺激的な時間。仕事とは関係なくまた臨席してただ聞いていたいと感じました。(木戸敦子)

爽樹新年俳句大会 句集出版祝賀会

(埼玉県・川越市)

去る1月19日、川越東武ホテルで行われた爽樹俳句会の新年俳句大会・句集出版祝賀会にお邪魔させていただきました。当日は会員の多くが一同に会するとあつて、新年にふさわしい晴れやかな笑顔とお召し物で、受付から既に近況報告に華が咲いている様子。定刻となり、司会の片岡啓子さまのご発声で開会、そして小山徳夫代表よりご挨拶。

「昨日の北風が嘘のように、今日は風がぴたりと止みまさに爽樹日和。創刊より3回目の1月号をむかえることとなり、着々と育つてきていると感じる。当会は結社ではなく同人誌的な運営をしている俳句会であるが、句会のみに参加する方々を含めて200人を超えるという大所帯の珍しい会。このような会が、むしろこれからの俳句会のあり方の一つではないか、そしてそのような新しいあり方を求めていく使命が当会にはあると思っている。皆さんのアイデアも取り入れ、あるべき



▶代表 小山徳夫様



▲本日の司会 片岡啓子様



▲副代表兼編集長 川口襄様



▲乾杯 本阿弥書店「俳壇」編集長・田中利夫様

姿、爽樹の生き方を考えていきたい」と力強く締めくくられました。

昨年10月の遠藤副代表のご逝去により、今後、副代表と編集長の二足のわらじを履くこととなった川口襄さまのご挨拶に続き、本阿弥書店「俳壇」編集長・田中利夫さまより乾杯とお祝いのお言葉。

そして、お待ちかねの新年俳句大会の表彰へと移ります。事前に受付けた116句より小山代表が選んだ特選5句、準特選5句の結果は――。

◎特選5句

初日の出「爽樹」飛躍の年であれ 正行
母と吾の白寿と傘寿福寿草 卓郎
おみくじを見せ合うてをり春着の子 邦子

ふるさとの酒を封切る今朝の春 光子
下ろしたての靴小春日を使ひきる 千恵子

◎準特選5句

胸中に熱き一樹や千代の春 のぶ子
雪嶺の耀く今朝の一步かな 美智穂
膝の子と初湯大きく溢れしむ 眞彦
風狂に二心はあらず去年今年 裕介
山を誉め山と酌みつつ三ヶ日 きみ枝

続いて、本日投句した78句(二人一句)より、川口編集長、小山代表が天地人3句の選をします。

◎川口編集長 天地人3句
人ときめきは生きてる限り青木の実 佑

地言祝ぎの詩高らかに寒日和 和子
天爽樹への道一筋や冬萌える 美智穂

◎小山代表 天地人3句
人おかつばの頃も丸顔手毬唄 順子
地 飛翔へと集ふ宴や鷹の影 富朗
天 冬木の芽「爽樹」羽ばたく時来り 正行

平成25年「爽樹」新年俳句大会・句集出版祝賀会



▲新年俳句大会事前投句表彰
前列が特選、後列が準特選の各5名

5年「爽樹」新年俳句大会・句集出版祝賀会



▲当日句受賞者の皆さま

その後、この2年間で句集を出版された4名の方にお祝いが贈られ、それぞれ文學の森「俳句界」林誠司さま、ふらんす堂・中井愛さま、本阿弥書店「俳壇」田中利夫さま、そして当社の木戸敦子も、名だたる出版社の方とともに僭越ながらスピーチをさせていただきました。各人より披露される様々なエピソードや句の評価に耳を傾けているうちに、早くも川口副代表による中締め場所をかえての二次会のカラオケでは、小さいながらもステージがあり、芸達者な方々のパフォーマンスあり、玄人はだしの美声あり、プロかと思まがうような店のママありと、あつという間に楽しい夜はふけていきました。



▲4名の句集出版者

★今後、より多くの方がその元に集い、悪い、研鑽しあう「爽樹」がますます活き活きと葉を繁らせ、俳句会の新たなモデルケースとなりますよう祈念しつつ、微力ながら尽力させていただきます。

(木戸敦子)

笑顔礼讃西東

田澤宏様

『川柳第三句集どきどき』等
(新潟県・新潟市)

ここ数年にわたり『川柳第三句集どきどき』『随筆集ご無体な』『川柳うめくさ』と3冊の本を発行された田澤宏さまにお話をお聞きしました。

◎まずは川柳との出会いから：

教員として山間部の小学校に勤務している頃、川柳をしている先輩教師から、数人で手ほどきを受けることに。その後、忙しさゆえ約30年川柳とは無縁でしたが、田舎の小学校に転動になった際に生徒の父親からもらった川柳の本がきっかけで、新潟川柳文芸社に入り川柳を再開。昭和61年のことです。

◎以来、28年続けてこられた原動力は？

再開して2年足らずの句会会で出された課題「どきどき」を詠んだ「言いよどむ医師の言葉が胸を刺す」の一句が、五客に選ばれたのです。うれしいやら、ビックリするやらで浮立ったことを今でも覚えています。その句を、当時NHK川柳学園の先生に添削いただく



▲いつもニコニコと笑みをたたえる田澤さま

「課題を詠み込まず、これだけ詠めればたいしたものだ。医師の前にいる患者の不安が伝わってくるいい句です。頑張ってください」と励ましのお返事をいただき、これをきっかけに、平成2年頃から本格的に川柳にのめり込んでいったというわけですね(笑)。その意味で

句集名『どきどき』は私の原点であり、初心に戻してくれる言葉かもしれません。

◎どのように川柳を作るのですか？

課題が出されるとその日か次の日から作り始め、締切間近に見直してはまた手を入れて提出します。というより、早めに作っておかないと毎月の柳誌の編集があるので、とても追いつかない。最終的にはパソコンで入力しますが、最初は必ず鉛筆で書きます。それを見て考えて何度も直すから、最初にパソコンには打てないのです。のくせ打ち直す時にまた直したりするので、人よりも一オクターブずつ遅れていく。教員の時、教頭さんが聞きながらすぐにパソコンでパースと打っていて、本当にうらやましかったです。

◎作るコツのようなものはあるのですか？

試みたことはありませんが、下手な手を使って狙おうとすると全ボツになります(笑)。例えば「ここにある茶碗、ただ真つ正面から見たのでは平面になります、斜めから見ると影ができる。その影に人間の心を詠むと、茶碗は茶



▲原点はいつも鉛筆書きの原稿から



▲過程を大切にしたら結果がこの数々の受賞に

碗じゃないんですね。来月の課題「薄い」にしろ、まずは辞書をひき、紙の薄さ、瀬戸物の薄さ、人情の薄さ…などとヒントを得てそこから作ったりもします。

◎他の2冊は？

平成18年7月号より新潟川柳文芸社の柳誌『川柳にいがた』の編集をお手伝いすることになり、より楽しんでいただけよう、川柳を中心とした読み物を極力取り入れていこうということになりました。しかし、蓋を開けてみると原稿が不足するという不測の事態に直面し(笑)、余白を穴埋めする原稿を書くため必死で資料を漁り、毎月が綱渡り。でも、そのことで改めて川柳の奥深さを知る機会を与えられ、約3年にわたる試行錯誤の末の稚文を『うめくさ』としてまとめました。

おり「習作の会」で書いた随筆や小説もどきから数編を選んで『随筆集ご無体な』としました。

◎いつも穏やかでニコニコしていらっしやいますか？

本当は気が短いのですが、どうせ生きるのなら笑いと笑顔がいい、その方がお迎えが来ても笑っていられます。先日「快老のスヌメ」という随筆を書きました。二人世帯で互いに苦り切った顔をしててもねえ。腹の立つこともありましたが、自分が怒ってみたら大勢に影響はないです(笑)。難しいけれど、17文字の中にどれだけ人生を凝縮して歌い込めるのか、これからなるべくボケないように川柳の魅力に素直に従っていきます。

『川柳第三句集 どきどき』より5句
生き方を変えずに老いの楷書文字
言い分をソフトな耳で聞いている
カラフルな薬で老いを軽やかに
足跡に春の香りが立ちこめる
長く生きまアるく生きて隅っこに

★新潟市の算数部長だった教員時代、子どもは三人いれば三様の考え方があり、結果も大事だが、より大事なのは過程であり、そこへたどり着く思考であると感じたという。おっしゃるご本人こそ、まずは考え、手を動かして、また考え、手を動かして、その繰り返しを淡々と実践していらっしやるように見える。指導教官であった師の教え「遠回りでも確実に」を自分のものとして習得した結果が、今の田澤さんの中に確かに結実し実証している。(木戸敦子)

投稿作品

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。しめきり 2013年3月15日まで

俳句

- 1 伯楽の師にあやかりて恵方道
有坂馨園(福島県)
- 2 うたかたの夢に漂ふ都鳥
環順子(東京都)
- 3 目札に心触れあひ枯野道
木村美智穂(埼玉県)
- 4 紅染むりんご除染の日々を胸に秘む
佐藤正子(福島県)
- 5 老いたりといへど詩あり初御空
大谷茂(埼玉県)
- 6 草津路やマスクの祖父の目の潤み
竹本美美子(新潟県)
- 7 しなやかにしたたかに生き山眠る
稲垣恵子(埼玉県)
- 8 地中より侏儒の蜂起か霜柱
川口襄(埼玉県)
- 9 童吹く初音の響き長閑なり
須澤重雄(長野県)
- 10 潮騒のジュリアの祠宇や石露の花
山本紀昭(埼玉県)
- 11 師を囲む出湯の宿の雪見酒
中西秀雄(東京都)
- 12 寒造り五感鋭い女杜氏
山本吉夫(三重県)
- 13 クリスマスツリの玉に映る街
鈴木岑夫(千葉県)
- 14 マルセーユギヤバンの涙冬風に
矢野絹枝(東京都)
- 15 「さようなら」「またね」にかへて返り花
関根千恵(埼玉県)
- 16 落葉坂千歩念々光堂
小島岳青(新潟県)
- 17 小春日の星故兵士の墓の上
居原田連星(大阪府)
- 18 これよりの喜怒哀楽や喜寿の春
阿部至(埼玉県)
- 19 冬將軍荒れた海にも花をそえ
水落重武(新潟県)
- 20 読初や杜甫と李白に親しみぬ
星野三興(新潟県)
- 21 ヒトの死は口気の如き冬の川
安木沢修風(新潟県)
- 22 日本語と友得て涙ぐむ師走
富樫和子(山形県)
- 23 年毎に未知の老あり年明るる
井原毬子(東京都)
- 24 父の日や生きる術真似白寿まで
塚田寿子(埼玉県)
- 25 銀春のときめき胸に去年今年
沢田稲花(山形県)
- 26 骨納め棲取る指先初しぐれ
高橋トミ子(山形県)
- 27 千両のこぼれ落ちしや青畳
阿部徳夫(宮城県)
- 28 初鏡胸高からし低くからし
菊池シユン(青森県)
- 29 仏飯の山盛りに年詰まりけり
今井岩夫(千葉県)
- 30 上野の山は東京の山初鴉
鈴木智子(千葉県)
- 31 八十路ゆく幸を賀状にこめにけり
堀木和子(大阪府)
- 32 大根漬かくし味など娘に語り
大場きよし(宮城県)
- 33 年の瀬や喜怒哀楽は皺の陰
橋本世紀男(東京都)
- 34 柿落葉掃けばとつぷり日の暮るる
大阿久雅子(東京都)
- 35 友減りて産土の里山眠る
檜山とり子(東京都)
- 36 とりどりの返り花あり植物園
古谷力(東京都)
- 37 片手ほど残りし家並初山河
土谷敏雄(秋田県)
- 38 葉牡丹の渦まだ固し駅広場
佐瀬千恵(神奈川県)
- 39 年の瀬や返り見るなり我が年を
河合ヤスエ(大阪府)
- 40 運だめしテイッシュ一個の福を引く
長峰正晴(千葉県)
- 41 月浴びる久女の句碑の褪せぬまま
浦橋克行(兵庫県)
- 42 石仏に供えし茶わんの薄水
服部八重子(東京都)
- 43 点滴の落ちる早さや冬ぬくし
小形さだ(東京都)
- 44 小春日や城の太鼓を爪はじき
内野彰子(神奈川県)
- 45 丹精の葉ぼたん列へ春を待つ
山田幸代(兵庫県)
- 46 点滅は螢の鼓動こもり沢
佐野和彦(静岡県)
- 47 寒空に一人旅なり永遠の月
吉村充治(埼玉県)
- 48 雪を漕ぐ秋田美人か雪女
三津木俊幸(千葉県)
- 49 熱風邪に夢不気味なる一夜かな
大輪靖宏(神奈川県)
- 50 冬の暮家なき猫のうす毛かな
千代田栄次(東京都)
- 51 蒼天やクレイン釣り上ぐ鯛雲
関原幸子(東京都)
- 52 冬至湯に今年も亡き母恋ふるなり
小堀高秀(群馬県)
- 53 二の酉や連の一人がはぐれけり
藤沢樹村(東京都)
- 54 故郷の豪雪案じて燈を消しぬ
青木ケン子(埼玉県)
- 55 夫の座の欠けて七年去年今年
堅田秀子(東京都)
- 56 葉師寺へまつすぐの路地返り花
福山三智子(東京都)
- 57 通勤の電車の窓の遠花火
山崎吉晴(群馬県)
- 58 選挙終え国民のかまどに初明り
田野倉訓郎(東京都)
- 59 忘年会終着駅を戻りたる
早矢仕那夫(愛知県)
- 60 淋しさの夕日はなさぬ百々柿
清まさじ(静岡県)
- 61 巳年には新たな希み路地の風
忍正志(兵庫県)
- 62 加湿器の湯気よりポアーンと大魔王
梶鴻風(北海道)
- 63 九ちゃんの歌は永遠なり山眠る
井上静夫(栃木県)
- 64 近況は手書きで二行年賀状
大橋恒次(新潟県)
- 65 初雪や今日のいのちを生きること
若月理依子(新潟県)
- 66 重ね着の刑事転びし尾行かな
加用章勝(千葉県)
- 67 「金」といふ縁遠きもの年の暮
石崎ひろ美(神奈川県)
- 68 鹿笛の遠き山から時雨けり
上村元義(神奈川県)
- 69 名優の訃報駈け抜く街師走
紺谷睡花(東京都)

- 70 金婚式迎へて夫と新酒酌む
成田節子(山形県)
- 71 かりがねや石に刻まる童唄
小野寺裕子(宮城県)
- 72 孤独さや寒林抜けて来し漢
吉田未灰(群馬県)
- 73 忍一字銘とし生きむ筆はじめ
田島星景子(宮城県)
- 74 初雪や風の舞ひ舞う身をほそめ
副島加代子(宮城県)
- 75 落ち鮎のしゆうえんぞ告ぐしまいヤナ
小林敏宏(長野県)
- 76 竜泉のこの道この風一葉忌
松尾らん(東京都)
- 77 悴む手釣銭零す朝の市
田中昶(鳥取県)
- 78 柿つづく野鳥に見入る三歳児
小山たけし(埼玉県)
- 79 庭隅の色競ひ合ふ実千両
杉原明子(静岡県)
- 80 ききに行く冬の怪談細川邸
須田洋子(埼玉県)
- 81 一献の染み入り街の灯の籠
大曾根育代(埼玉県)
- 82 手じめる輪にだんまりの大熊手
野村牟人(東京都)
- 83 七十路や桜紅葉の舞い上がり
菅野本枝(東京都)
- 84 成すことは変りばえなし去年今年
山本善輔(兵庫県)
- 85 偕老や妻の分だけ冬ぬくし
川崎洋吉(福岡県)
- 86 この村でバスは終点吾亦紅
湯浅芳郎(岡山県)
- 87 もう来ないあの筆痕の年賀状
辻升人(東京都)
- 88 生き地獄続く覚悟や寒の月
緑川禎男(埼玉県)
- 89 冬木立日差しもみゆる暖かさ
鈴木みえ(長野県)
- 90 百姓の顔をならべて冬至風呂
寺岡文生(静岡県)
- 91 水仙に勢いありて気をもらふ
内河邦久(東京都)
- 92 着膨れて仮面人にとなりにけり
神作洗江(埼玉県)
- 93 器用より愚直に生きて年迎う
布目雅之(埼玉県)
- 94 新米の五疋に託す縁かな
美濃部紘三(新潟県)
- 95 幾年も着なれし夜着やはなされず
小林紀美子(東京都)
- 96 落葉焚く千木の青錆古き宮
中村和弘(愛知県)
- 97 冬茜愛犬散歩寒くても
大橋絵代(千葉県)
- 98 道の辺の草にありけり霜の声
二瓶邦枝(埼玉県)
- 99 小春日や床の間を背に喜寿の膳
飯田ヒサ(神奈川県)
- 100 一皮をむけば鬼女とも慈母の顔
大塚徳子(埼玉県)
- 101 枯木立透かし夕日の坂下
中田文子(大阪府)
- 102 観音の微笑み賜ふ冬の旅
勝田久美(大阪府)
- 103 雪嶺や獣の道をのぼる柚
西口東治(大阪府)
- 104 みかん山少女と歩く三万歩
竹澤茂子(大阪府)
- 105 学生の笑顔の向こう石路の花
星一子(神奈川県)
- 106 冬帽子目深に人と別れけり
山本直子(大阪府)
- 107 お龍との文を秘めたる懐手
炭崎博(滋賀県)
- 108 長電話いらついてゐる霜夜かな
池本勇(大阪府)
- 109 洗ひ物乾かぬ霜夜妻の留守
坪田勝秀(鹿児島県)
- 110 着ぶくれて心配の種消えゆかぬ
福岡悟(東京都)
- 111 噴火音さくら紅葉は空に舞う
山本せつ子(鹿児島県)
- 112 末枯のポプラ影引く水面かな
堀田寿美子(北海道)
- 113 空想に心遊ばせ日向ぼこ
高崎登喜子(東京都)
- 114 侘助に恋をしているネズミの仔
白戸麻奈(東京都)
- 115 御師の里こぞりて太き牛蒡締め
津布久信雄(東京都)
- 116 樛や娑婆のしがらみたちきれず
中野豊彦(東京都)
- 117 その人の顔浮かび来る年始状
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 118 紅葉や溪流さおさす夫婦船
杉村美保子(岩手県)
- 119 縁側の昭和のミシン花ハッ手
浅野信廣(宮城県)
- 120 柵木の花ひとつまみして別れけり
高瀬秀嘉(静岡県)
- 121 風花の天翔る氣に鬼瓦
井上氣海(広島県)
- 122 悲しみを燃やせば雪となる日暮
棚橋麗未(東京都)
- 123 冬ざれの歌舞伎役者や天召され
福田和子(東京都)
- 124 裏通り熊八とありおでん酒
宇田川正雄(埼玉県)
- 125 古里の唄ふ亡き兄冬の星
菅井文男(新潟県)
- 126 表札に嫁の名加ふ桃の花
遠藤さん子(神奈川県)
- 127 冬籠昔米つく音のして
津田忠彦(岡山県)
- 128 山ぢうに動力響く師走かな
油谷郷史(兵庫県)
- 129 友の計の胸を離れず年詰る
山崎ゆき(東京都)
- 130 アザレアの白どごまでも清きなり
小井寒九郎(三重県)
- 131 行く年やひとりつきりの観覧車
岩永登茂子(大阪府)
- 132 あの唄をまさかの人が年忘
今井勝子(新潟県)
- 133 反抗も大人への道雪しまく
高橋まさ子(宮城県)
- 134 日のきらの水亭にまで冬ぬくし
浅倉里水(千葉県)
- 135 ぐんぐんと確りせよと初日の出
藤田照代(岡山県)
- 136 寒波来て雪がセシウム包み込む
増島淳隆(東京都)
- 137 紅葉を踏んで楽しむ千鳥足
木下精(大阪府)
- 138 晩年てふ背水の陣木の実降る
増本和子(大阪府)
- 139 北風に揺れて奏でる絵馬の列
大久保アヤ子(東京都)
- 140 数へ日を数へてみるや日の足りず
本間七窪子(山形県)
- 141 昇天の友にも書きし年賀かな
石井美智子(埼玉県)
- 142 朝ぼらけ籬に遊ぶ嫁が君
山下美絵子(埼玉県)
- 143 冬の霧終日はれず不安なる
延原令岱(岡山県)
- 144 逝く空は何処ぞ妻よ秋の風
関忠恕(静岡県)
- 145 「さようなら」訣れの水雨降りやまず
堀井醉人(茨城県)

投稿作品



- 146 初富士を背に受け議事堂凜と見ゆ
原田かず多(千葉県)
- 147 何もかも忘れただ今冬眠中
森川千英子(千葉県)
- 148 気晴らしと女多弁や暖房車
川崎貴行(熊本県)
- 149 クナシリは還らぬ島かつバメ飛ぶ
早坂絃司(北海道)
- 150 つわぶきや耐えるころを老の身に
岩村昇(神奈川県)
- 151 元日や舌にころがす吟醸酒
重原昇(新潟県)
- 152 逝きし友日に日に遠し冬の星
中野博夫(埼玉県)
- 153 乞食の椀にコインの冬の音
原田麦吹(埼玉県)
- 154 生くるとは耐ゆる事なり冬さつび
道給一恵(埼玉県)
- 155 夕日さし茜に染まる雪の原
田中恵美子(山形県)
- 156 八十路坂今年も第九に燃えつきて
芋木匡子(滋賀県)
- 157 節分の宵の町から声もなく
齊藤安弘(神奈川県)
- 158 寒雀止まれば一枝揺れ止まず
林多み子(群馬県)
- 159 初富士や生き急ぐこと戒めて
日下温水(東京都)
- 160 いつの間に八十路に入りて尽きぬ華
西條公雄(埼玉県)
- 161 淑気満つ開運橋に鳩の群れ
青木涼子(埼玉県)
- 162 鬼貫の禁足旅記や去年今年
津田吾燈人(高知県)
- 163 银杏散る太古の詩片撒くように
渡辺嘉幸(東京都)
- 164 帰り花晩年を日々新しく
松嶋光秋(東京都)
- 165 日だまりがこんなに嬉し散歩道
針生清(千葉県)
- 166 初鴉上州武州空一つ
古郡孝之(埼玉県)
- 167 雨音も走りて来る小晦日
椋本望生(大阪府)
- 168 帰りにも同じ子に会ふ雁木道
小林七重(新潟県)
- 169 着ぶくれの襟を正して二重橋
橋本良子(埼玉県)
- 170 もの思ふ歩く水辺に石路の花
倉岡依世(東京都)
- 171 初芝居大見得に舞ふ紙吹雪
西川孝子(奈良県)
- 172 露天湯の空の青さや紅葉晴
柴田恵美子(北海道)
- 173 珍しく炊き込み御飯クリスマス
山岸伊久雄(東京都)
- 174 年用意灯油一缶買ひ足して
田野井一夫(栃木県)
- 175 初めての秘仏に会いぬ時雨にも
中山日出子(大阪府)
- 176 黒人の白き歯並びクリスマス
高杉杜詩花(北海道)
- 177 山眠る前の庭師の録音
井田由利子(宮城県)
- 178 冬ざるる威厳崩さぬ長屋門
羽根田明(神奈川県)
- 179 骨太や両の手の平冬日浴ぶ
貝沼とし子(愛知県)
- 180 日矢射せる仄かに染むや仏の座
小澤みつる(静岡県)
- 181 富士山の天気云云去年今年
杉浦俊雄(静岡県)
- 182 五十年よく持ったねと霧襖
池田岬(埼玉県)
- 183 初日の出西山奥山青い空
橋本まこと(栃木県)
- 184 リラ散つて昭和の歌の遠くなり
石田義岡(山梨県)
- 185 熱燗や何とでもなれと常無口
唐沢孝子(長野県)
- 186 米寿とは嬉しく淋しお元日
外賀喜咲(京都府)
- 187 水を打ち隣る人との長話し
五十嵐勝敏(新潟県)
- 188 十二月庭師気取りて植える花
森ふく(千葉県)
- 189 枝ゆらす北風一葉残し行く
駒場京子(神奈川県)
- 190 子等集うしはし聞き役実南天
岡村君枝(茨城県)
- 191 小雪まう池にやすらぎわたり鳥
長谷部喜代子(大阪府)
- 192 目覚ても布団の温もり抜けがたし
伊藤幸枝(愛知県)
- 193 削り節おどる湯豆腐のれん酒
神一男(静岡県)
- 194 ならぬことはならぬものです嫁が君
馬場綾子(新潟県)
- 195 磨き合ふ妻と句の友年新た
邑橋節夫(兵庫県)
- 196 花札もカルタも昭和の抽斗に
押谷盛利(滋賀県)
- 197 叱られた死んだ父上初夢に
五十嵐睦博(新潟県)
- 198 初けいこ新島八重の書を写す
岸田晴代(奈良県)
- 199 年の夜や身の奥底の千鼓動
木村徳光(埼玉県)
- 200 四海涛光を背負うと會孫生まる
木村舩(山形県)
- 201 逢遇や白髪そめ色初雑話
藤井春三(埼玉県)
- 202 戸惑ひは捨てる齡や寒椿
大窪美代子(大阪府)
- 203 ひろがりし利他の心の松納め
北野耕兵(千葉県)
- 204 アンコールコール止まぬやクリスマス
柳澤京子(宮城県)
- 205 宅配のどかと櫃に今年米
磯部力(新潟県)
- 206 海風に気品つやめく野水仙
増田公代(東京都)
- 207 なまけ癖年積めば増す雪の朝
井口桂山(新潟県)
- 208 情念を纏めて捨てて昼替え
早乙女文子(埼玉県)
- 209 月山は白く輝く夢たくす
五味田幸夫(神奈川県)
- 210 冬木立午後の弱陽を漁り
有田裕子(北海道)

短歌

- 211 この町に生れこの町に育ちこの町に嫁
ぎ吾の生きこし 佐々木都(長野県)
- 212 五姉妹てふ愛し教へ子らに囲まれ亡
き妻の思い出聞くは嬉しき
今井忠一(東京都)
- 213 選挙後はどこへ向かうか案じられ気
になりおればやはりそうなり
篠原三郎(静岡県)
- 214 ふと覚めてねむれづにある冬の真夜
胃ろう延命われに用なし
黒澤正行(福島県)
- 215 すてきなおんなのひとがあさコーヒー
店に顔をみせにきたごめんなさい
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 216 初雪で折れし南天一枝を早々生けし
初春の花 阿部澄江(宮城県)
- 217 こだわりを持って励まむ幾許の残る
余生に情寄せつつ 野木宗信(奈良県)
- 218 宿題はジャンボタニシと一年をしめくく
るテーマ大きく 久保和友(滋賀県)

- 219 開門と同時に雪の降り初めて修学院
離宮墨絵のごとし
宇都宮萬里(静岡県)
- 220 街路樹の銀杏落ち葉がからから舞う
空澄み渡る師走朔日
高橋邦子(高知県)
- 221 朗読をたのまれて座する晴舞台「し
にせ旅館」の百人の前
高須孝(愛知県)
- 222 雪下ろしした雪をまた積み上げる豪
雪地ならではの宿命
大竹憲弥(新潟県)
- 223 大雪の余りに早いこの冬の厳しき先
が思いやられる 山本敏順(長野県)
- 224 我が気持ち若い若いと思いつつ鏡見ら
れば老いのしわなり
浅沼正子(神奈川県)
- 225 継母逝きて甘えたあの日の幼き日あ
なたの娘で幸せでした
田中迪子(東京都)
- 226 線路ざわ車輪が起す風と音ねこじゃ
らしが音符に似たる
大鳥居牧子(東京都)
- 227 山陰にて松ばがに配膳はみ出でて袖
子は土佐の香招き添へたく
西山梯三郎(高知県)
- 228 初日早や夕日に変わる進路取る政治
も同じ変はり身早し
濱田イサオ(福岡県)
- 229 新年の春を迎えて八十八一人旅立つ
老の坂道 関子利明(兵庫県)
- 230 華やいで咲くこともなく枇杷の木は
小雪の季に白き花持つ
桑原謙一(群馬県)
- 231 初春の光さしこむ厨にて家族そろい
て未来を語る 櫻井文子(東京都)
- 232 今年もまた白鳥は来ず越辺川いつこの
川に羽根休めしや 百花清(埼玉県)

- 233 白鳥のしきり鳴く声聞えれど降り初
めし雪すべて攫う日
田中豊恵(新潟県)
- 234 奥津城の空は広らにわが君を迎ふる
如く百千鳥舞ふ
萬濃その子(神奈川県)
- 235 引き上げるふとんの衿にふと匂う亡
母によく似たわれの匂いは
寒川靖子(香川県)
- 236 正月は迎へられぬと医師は言う好物
の数の子口にする亡姉
音喜多千津子(埼玉県)
- 237 黒髪の多く残れるこのわれに染めてい
るかと思ふ人のをり
小暮昭司(群馬県)
- 238 老犬と猫五匹の湯たんぽをせわしい
けれど楽しむ日々
濱崎祥子(鹿児島県)
- 239 凜として備中の里に咲きにけりいと
しき君は冬の貴婦人
神野弘(岡山県)
- 240 野沢菜漬けうからら美味しくいただ
きぬ駿河のお茶とほど良く和して
土屋喜雄(山梨県)
- 241 わこちゃんに一度聞きたやあの発想
六年生の三十一文字
佐伯セツ子(香川県)
- 242 晩秋の駅のホームに脚挟む車内の客
の腕にすがりて 佐野澄江(山梨県)
- 243 水牢の跡と伝へる岩穴の奥よりひび
く春の水音 青木日出男(群馬県)
- 244 ウオーキングちよと休んで佐谷田橋
白い富士山浅間も見える
新井賢(埼玉県)
- 245 病む吾に高き望みはなけれどもただに
静かに眠らせ給へ野中信夫(東京都)
- 246 茫々と齡かさねて一月一日風に吹か
せて空のバス行く 北岡晃(兵庫県)

- 247 免許更新終えたる今日の冬日和まず
はゆるりとアクセルを踏む
山内寿子(京都府)
- 248 湖は銀河の如く輝きて躍る白鳥白く
光れり 緑川葉子(福島県)
- 249 日に何度言い交すだろ「ありがとう」
婚六十年の初日おろがむ
吉澤八千代(群馬県)
- 250 元旦にニュースで友の訃報きき老いて
独居の身の上を知る
岩崎令子(大阪府)
- 251 電線の雀もからすも減りました
大江秋月(兵庫県)
- 252 螺子を緩めて落す天井
松田重信(埼玉県)
- 253 右肩を上げようせめて衣紋掛け
丸山芳夫(東京都)
- 254 悔しがる記憶のページみつからず
佐野一江(静岡県)
- 255 たわいないいさかい笑う昼の月
石原岳(群馬県)
- 256 跳躍を夢見てとぐる巻いている
竹村穂夫(大阪府)
- 257 ゆつくりと歩く明日をみたいから
鈴木義雄(福島県)
- 258 里帰り母の味たべ安堵する
諸橋文男(新潟県)
- 259 心眠を開らき投じた清き票
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 260 黄泉からのお迎えまだか八十才
原田英一(千葉県)
- 261 少しずつ実感の湧く母の死後
潮田春雄(千葉県)

川柳



- 262 学校でいねむり塾で出す本気
藤井碩子(山口県)
- 263 通帳が風もないのにとんで行く
細川光子(栃木県)
- 264 タイヤヒラメヤ反日暴徒運動会
安部 哲(新潟県)
- 265 除夜の鐘耐えたこぶしに聞かせてる
北村純一(神奈川県)
- 266 千両の役者が育ち村芝居
工藤昌見(山形県)
- 267 初恋の君永遠の女学生
岡本恵(茨城県)
- 268 古希ひとり渡辺淳一を読んで
藤井北灯(福岡県)
- 269 おはよりの笑顔に会える散歩道
奥田音野(香川県)
- 270 捨てた夢拾い女を生き直す
小山恵美子(大阪府)
- 271 世の中の渦に揉まれず北極星
久本にい地(岡山県)
- 272 鴛鴦は歩幅を緩め振り返える
楠瀬美香(高知県)
- 273 雪つりの松は緑の蛇の目傘
奥那於子(大阪府)
- 274 焼芋車素知らぬ顔ですれ違う
栗原黎(群馬県)
- 275 一同を泣かせ答辞を締めくくる
安田翔光(香川県)
- 276 どんよりと曇りの空が寒くする
近藤はつみ(福岡県)
- 277 辛棒も我慢も知らぬ子の主張
藤沢健二(千葉県)
- 278 狂おしい花だやっぱり毒がある
高柳閑雲(愛知県)
- 279 タウン誌も入れて田舎へ荷を送る
鈴木青古(茨城県)
- 280 雑音を軽く流してからの決
田澤宏(新潟県)

- 281 冤罪が晴れて心は青い空 大岩歌子(岡山県)
- 282 悩みつつ無難な道をつい選ぶ 菅原和子(茨城県)
- 283 ひとつ鍋たべて無防備恋進む 山崎一嘉(愛媛県)
- 284 なきやさみしあれば腹立つゴミ拾い 川沼幸江(新潟県)
- 285 桃色の保険証から冷酷さ 大川聡(新潟県)
- 286 干した雑魚笑顔なるまで干し続け 松尾健二(千葉県)
- 287 グラリ来て思わずあらぬ名前呼ぶ 近藤富夫(東京都)
- 288 卒寿とて苦渋の余生如何にせん 磯山陽吉(東京都)
- 289 公共工事景気対策国債へ 野中よしみ(神奈川県)
- 290 夢もたせあと知らんぷり宝くじ 中林恵子(大阪府)
- 291 この国をダメにした党又選び 村岡盛英(群馬県)
- 292 暑イ〜寒イ言いつつ年暮る 岡弘子(埼玉県)
- 293 どこ行った見かけないなあ赤トンボ 鈴木章(新潟県)
- 294 賛成も反対もなく中間点 野田明夢(新潟県)
- 295 終日の耳鳴りにもうなれてる 櫻崎篤子(京都府)
- 296 尖閣が大きさになりガンとなる 守屋高雄(岩手県)



12月号の 心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返をお寄せ頂きありがとうございます。その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。



山本吉夫様

《大賞》 283 臥す妻に音無く締める白障子

・あたたかい愛情を感じる 藤沢樹村(東京都)・奥様のやさしいお心づかいに感動しました 堅田秀子(東京都)・静かに障子をして、奥様をいたわっている様子が表現されているところ 成田節子(山形県)・そとと障子を締めている様子が目に見えるようです 杉原明子(静岡県)・夫婦の情のある一句 飯田ヒサ(今井久枝)(神奈川県)・病で臥す人への思い遣りと白障子の空気が伝わってきます 中野豊彦(東京都)・丁寧な生き方、あふれる愛情 浅野信廣(宮城県)・優しい夫婦愛に感動深く拝見 棚橋麗未(東京都)・病む奥様への優しい心遣いが感じられる 山岸伊久雄(東京都)・愛情が感じられる 駒場京子(神奈川県)

【白句自解】
公務員として勤務すること三十六年、その間単身赴任あり遠距離通勤ありと

妻には大変苦勞をさせて来ました。退職してこれから二人でと思つて居た矢先、妻はC型肝炎を患い、更には心臓発作が起ころうになり寝たり起きたりの生活です。朝、目を覚ますと先ず妻の部屋の白障子をそとと開け、中の様子を窺うのが習慣となつて居ます。今朝もそとと白障子を開けますと安らかに眠つて居り一安心と胸をなで下ろしました。

《短歌》 29 泣きに来る母の墓前に彼岸花ものい うことくくれないに咲く

寒川靖子(香川県)
・今の私の心境にそっくり。私の場合は夫であるが… 萬濃その子(神奈川県)・全部読み終わつても何か心に残る一句でした 木村誠一(神奈川県)・母の胸に飲んだ乳、なつかしい。くれないに咲く、花 五十嵐陸博(新潟県)ほか

《川柳》 54 散歩道やがて徘徊する予感

藤沢健二(千葉県)
・自分の老後も凶星かも、野山が大好きで雪が降る迄、遊び廻つてるので… 高橋トミ子(山形県)・身につまされそう七十八歳だもの 増島淳隆(東京都)・何となく自分にも訪れる事かも知れぬ思いと自虐的なおののきに脱帽！ 川沼幸江(新潟県)ほか

《俳句》 201 お母さん「浄土も暑い秋ですか」

中岡昌太(神奈川県)
・いくつになつても母への思いは残っている 辻升人(東京都)・暑い秋に極楽浄土にいるお母さんを想い、気遣う心に打たれた 布目雅之(埼玉県)・墓参りで私も母と会話します 岩永登茂子(大阪府)・口語調の素直な問いかけ。暑さに

閉口しつつお母さんに呼びかける素直さに負けました 増本和子(大阪府)・妣への思慕ですね。古賀まり子さんの句を思い出す 原田麦吹(埼玉県)・いくつになつても母を思う気持ちは変わりありません、本当に残暑のきびしい秋でしたからね 橋本まこと(栃木県)・今年の秋は暑かった 本間七窪子(山形県)・浄土にいる母へのおもいがうまく表現されています 椋本望生(大阪府)・母におもいを寄せた佳句 清水美千(東京都)

《他にも》

- 1 金色の稲穂のかりり満ちみちて秋夕 焼の限界集落 果澤正行(福島県)
 - 6 年の瀬や越すに越せない国境線竹島 尖閣北方領土 岡子利明(兵庫県)
 - 59 百円の秋刀魚刺身で睦しく 小山恵美子(大阪府)
 - 68 ガラス越し母に似てきた立ち姿 奥那於子(大阪府)
 - 74 そこそこの色気忘れず世を渡る 大岩歌子(岡山県)
 - 90 あるがまま生かされ生きて秋深し 井原穂子(東京都)
 - 95 雪乗せて車も家も丸くなり 関根千恵(埼玉県)
 - 110 掌に受けし木の実に言葉あることし 吉田未灰(群馬県)
 - 120 急ぐこと何もなくなりこぼれ萩 堅田秀子(東京都)
 - 143 大根引き太き一本上げて見せ 田中昶(鳥取県)
 - 197 夫逝きて独りの夜の長かりき 萬濃その子(神奈川県)
 - 223 空似でも逢いたき人の冬帽子 堀田寿美子(北海道)
- ※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

**Q:バレンタインデーの
思い出を教えてください**
紙幅の関係上、
すべてのお答えを
掲載できません
ことをお詫び
申し上げます。



・人生、愛があるからこそ、生き甲斐で
しょう。
木村美智穂(埼玉県)
・手に息をはきはき新聞をもつてきて
くれた配達の子、今は車ですーつと。
チヨコレートも欲しがらない。
佐々木都(長野県)

・せっせと職場の男性へ「義理チョコ」を
送り、高価なお返しに喜んだりし
ました。
佐藤正子(福島県)
・友人とチヨコレートの数を競って火傷
しそうになったのを思い出しました。
松田重信(埼玉県)
・ある年の句会后「ずっと前から好きで
した：俳句が！」と言って渡すと相
手の表情がラブリーで胸キュンでした。
稲垣恵子(埼玉県)
・ギリチョコばかりでしたが遠い昔のこ
と。「ああ、オレの青春終わったなあ。」
と嘆息しつつつかしい。
鈴木岑夫(千葉県)

・息子にもらったチヨコレートを私らが
分けて頂戴したこと。
矢野絹枝(東京都)
・義理チョコも無くて淋しい退職後
橋本世紀男(東京都)

・あるもんですか。小島岳青(新潟県)
・ここ20年ほど独身の美女からもらう
チヨコレートに慰められている。
居原田連星(大阪府)

・教え子から帰るとき駅まで追いかけて
きてチヨコレートを手渡されたこと。
水落重武(新潟県)
・プレゼント八個も貰いホワイトデーが
大変でした。今は一個女房だけ。
石原岳(群馬県)

・亡き夫と東京駅ステーションホテルに
夕食を食べに行った日(ステーションホ
テルが私共の結婚式場です。)
井原毬子(東京都)

・デパ地下を長時間かけて歩いて、どの
チヨコレートを誰にプレゼントしよう
かな…と考えながら歩いたことです。
阿部澄江(宮城県)
・毎年一人娘にブランドチヨコレートを
プレゼントしてもらったことです。
阿部徳夫(宮城県)

・初入社の二十四才女性社員四名に囲
まれてモテモテで舞い上がった青春
どの恋もみのらず。
野木宗信(奈良県)
・三年前まで割烹を経営しておりまし
た。板前、お客様にとチヨコレートを
いっぱい用意しました。
鈴木智子(千葉県)



・夫と死別後24年バレンタインデーに
チョコをお供えすることがやめられな
い私です。
堀木和子(大阪府)
・雪が大降りとなって贈物が二日遅れ
となったこと。
土谷敏雄(秋田県)
・私が友人から頂いたチョコを妻が自分
の友人にプレゼントしている。
諸橋文男(新潟県)

・義理チョコを妻からもらった事。
中嶋秀次郎(埼玉県)
・娘からいつも花束が、孫からレタープ
レゼントが何より嬉しい。
高須孝(愛知県)

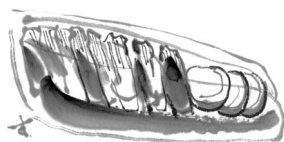
・亡き父にチヨコレートを送った時照れ
くさそうに笑ったこと。
山田幸代(兵庫県)
・私の若いころにはこういう習慣はな
かった。だからひがまないでいられた。
大輪靖宏(神奈川県)
・初恋の彼女と初めてラブホテルに入
りました。その後はご想像に任せま
す。
山崎吉晴(群馬県)

・古稀を前にして今でも妻と娘二人か
らチョコが贈られるのはちよっぴりう
れしい。
井上静夫(栃木県)
・お友達が混んでいるデパートでチョコ
を買う必死の形相が地元新聞に写真
入りで載ったこと。
若月理依子(新潟県)

・若い頃はチョコの数を仲間と競い合っ
たものです。
北村純一(神奈川県)
・ホテルでのディナーを続けていた妻も
他界してしまい…。
藤井北灯(福岡県)

・最近チヨコレートを
息子に買うのが楽しみ。
紺谷睡花(東京都)

・生前三才の男孫がI
CU(入院中)のベット
の枕元に看護師さん
や先生方からメッセー
ジを添えていただいた
沢山のチョコが並べて
あった光景が今でも思い出されます。
小野寺裕子(宮城県)



・理容業なのでお客様に一ケずつさし
上げています。浅沼正子(神奈川県)
・2月14日は結婚式。30年前の明治記
念館でした。
岡本恵(茨城県)
・教え子が下駄箱に短い手紙を添え、
小さい箱入りのチヨコレートをそと置
いていったこと。小山たけし(埼玉県)
・万年筆をもらいました。今も使ってい
ます。
須田洋子(埼玉県)

・今なら好きな人に渡せそうです。
小山恵美子(大阪府)
・昭和一桁にはマフラーの一枚位かな。
野村牟人(東京都)

・ウイスキーの小瓶を贈られた。
久本に地(岡山県)
・本当に好きな人には渡せなかった。
楠瀬美香(高知県)
・義理チョコは渡せても本命には手渡せ
ずに終わりました。
奥那於子(大阪府)

・若かりし頃にこんな事があつたらチョコ
も多かったろうに…。
辻升人(東京都)

A Q U E S T I O N N A I R E



- ・今は亡き夫が義理チョコを沢山山いだき子供達と舌鼓を打った遠い思い出があります。 栗原黎(群馬県)
- ・六十歳の時小学校時代の初恋の人からチョコレートを贈られたこと。 内河邦久(東京都)
- ・何と言っても孫からの絵手紙です。 美濃部紘三(新潟県)
- ・手作りチョコの試食をしてみたら塩チョコになっていてそれなりにおいしく家族で食べました。その後しばらくにきびが…。 大橋絵代(千葉県)
- ・昔を手繰りつつ、電話、手紙をもらったこと。 中田文子(大阪府)
- ・インドりんごをボーイフレンドからもらったかじり乍ら歩いた。 竹澤茂子(大阪府)
- ・多勢の女性店員を抱えていたお陰で毎年トラックは必要でした(笑)。 仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・お返しをもらった記憶なし。 濱田イサオ(福岡県)
- ・チョコレートを職場の若い男の子にやたら渡していたのを思い出します。 山本直子(大阪府)
- ・いい娘さんになった彼女は幼稚園のころからチョコを贈ってくれます。 安田翔光(香川県)
- ・チョコレートくじを頂いて開けたら皆さん全員大吉でした。 炭崎博(滋賀県)

- ・姑の誕生日で毎年姑の贈り物を買っています。 星一子(神奈川県)
- ・一ヶ月後が怖く遠慮する。 福岡悟(東京都)
- ・家内とのプレゼントつきのラブレター交換。 森俊彦(神奈川県)
- ・娘二人の幼い頃、手づくりのケーキをつくりました。山本せつ子(鹿児島県)
- ・社交ダンスをやつてる夫はチョコレートをいっぱい戴くがホワイトデーのお返しは私が選んでいる。そのかわりチョコレートはみな私がいただく。 高崎登喜子(東京都)
- ・友チョコを贈ります。 白戸麻奈(東京都)
- ・義理チョコレートを止めて震災地への義援金。 津布久信雄(東京都)
- ・娘が高校生の頃に本人の小遣いからチョコレートをいただいたことです。一度だけです。 松尾正一(岩手県)
- ・昔、生徒達にもらったチョコが山積みになったこと。 浅野信廣(宮城県)
- ・ダンボール三ヶースの義理チョコ、ホワイトデーのお返し、一ヶ月の小遣いが全部必要。 井上氣海(広島県)
- ・書道教室の若い男の先生に生徒さんがバレンタインチョコをプレゼントして結婚しました。 福田和子(東京都)
- ・校長室へ子どもたちがチョコや飴を持ってきてくれたことです。 田澤宏(新潟県)



- ・初めてもらったチョコ。空に舞い上る心地でした。 高柳閑雲(愛知県)
- ・女子事務員に初めて頂きうれしかったがお返しが高くつきありがた迷惑だった。 宇田川正雄(埼玉県)
- ・子供・孫とのチョコ交換程度。 菅井文男(新潟県)
- ・シドニーでバレンタインの夜、ホテルが取れなくて苦労しました。 夏目満子(東京都)
- ・岡山大学の講師をしていた時女子大生より書道のお父さんと言ってプレゼントされました。 津田忠彦(岡山県)
- ・娘達の真似して主人に送ったチョコ、何も返ってきませんでした。 田中豊恵(新潟県)
- ・上司よりバレンタインのお返しにランチをご馳走してもらった事。 藤田照代(岡山県)
- ・男の孫が2才のとき、はじめてバレンタインの日を迎えた時に、私にかわいいチョコをくれた。 萬濃その子(神奈川県)
- ・娘の作った失敗作の試食、たまらん!! 本間七窪子(山形県)
- ・好きな人にあげたいと言って遠くに住む孫娘からの贈り物が届く。 寒川靖子(香川県)
- ・この四十年間、欠かさずチョコを贈って下さる方がいます。義理チョコや物好きではありません。真情です。 延原令岱(岡山県)
- ・始めてのバレンタインチョコ、とうとう渡せずに食べてしまった事。 音喜多千津子(埼玉県)
- ・珍しいチョコレートをしばらく飾っていた事を覚えてます。 川沼幸江(新潟県)



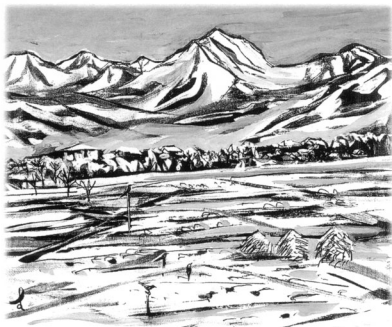
- ・娘二人からそれぞれ清酒を、孫からは初ひこの名でお菓子が来ました。「バレンタイン老には越の雪の酒」 関忠恕(静岡県)
- ・スナックのママさんから毎年忘れず頂戴してりましたが今は息子に任せました。 重原昇(新潟県)
- ・毎年二十個もらっていた遠い昔の話。 中野博夫(埼玉県)
- ・若かった、胸がどきどきとした思い出があります。 松田義登(福岡県)
- ・孫と一緒にチョコレートケーキを作った事が思い出です。 道給一恵(埼玉県)
- ・余ったチョコレートの手造り分を父のわたしに包んでくれました。 松尾健二(千葉県)
- ・亡夫から始めてのプレゼント。 芋木匡子(滋賀県)
- ・子供達が夫亡き後歌舞伎座に連れて行ってくれた事。 林多美子(群馬県)
- ・自分には遠い昔のこと。今は孫のやりとりを聞いている。日下温水(東京都)
- ・サラリーマン時代はいたたくチョコの数ばかり気にしていた。 神野弘(岡山県)
- ・教職時代、小学六年生女子からチョコレートを贈ってもらい感無量…大きな思い出。 石田義岡(山梨県)



- ・初恋のMさんのことが思い出されました。娘に初めて語り喜ばれました。二人きりではじめてのデート、大切な思い出です。 櫻井文子(東京都)
- ・四十四本のバラの花をもらったことです。 椋本望生(大阪府)
- ・義理チョコ全盛時代、出費が高み大変でした。 小林七重(新潟県)
- ・小さな小さな箱を、こっそりと渡した切ない想い出。 橋本良子(埼玉県)
- ・貰えば返さなければ…。年々おっくうになって来ました。 高杉杜詩花(北海道)
- ・義父と実父に小さなチョコの箱をそれぞれ送った時の反応はほとんどなりました。 井田由利子(宮城県)
- ・句会の女性に「バレンタインです。」とチョコをあげたら…後でお返しを頂いて赤恥かきました。 羽根田明(神奈川県)
- ・青春の頃バレンタインデーはなかったと思う。 あったとしても恥ずかしくて渡せなかったと思う。 中林恵子(大阪府)
- ・結婚する頃だったので主人に「チョコプレートが欲しい」と買ってもらいました。 貝沼とし子(愛知県)
- ・想像もしなかった憧れの人からの贈り物。 田野井一夫(栃木県)

- ・白地に赤い水玉のスカートを貰い水害にあつて、手荷物ごと流されてしまった!! 池田岬(埼玉県)
- ・孫にいただいたパジャマは特にぬくもりを感じます。 橋本まこと(栃木県)
- ・妻や子供には少しばかりのプレゼントをしたことがあります。 野中信夫(東京都)

- ・俳句仲間の句会でみんなからチョコをもらつてはいます。 神一男(静岡県)
- ・二月の句会はずもチョコプレートのおやつです。 馬場綾子(新潟県)
- ・現役時代の義理チョコがなつかしい。 木村徳光(埼玉県)
- ・勤めていた頃女子職員からの義理チョコ(男性全員にあり)。 鈴木章(新潟県)
- ・40代トラベルカードをチョコといっしょにもらつたのにはビックリ、うれしかったな。 北野耕兵(千葉県)
- ・義理でもらいホワイトデーのお返しに苦労した。 野田明夢(新潟県)
- ・時代の流れにそつて夫、息子、孫達にチョコプレートを買った。 吉澤八千代(群馬県)



安曇野冬景

新潟ぶらり

新潟県立植物園

暖かいところに行きたい、色のある世界に行きたい、と向かった。光あふれるガラス張りの温室で、色とりどりの花たちが待っている！と胸を膨らませて雪道を走らせること小一時間。結露した車窓から、植物園がみえてきた。

一九・八ヘクタールという広大な面積をもつ当園には、一〇万株もの植物が植栽されているという。しかし雪におおわれているので想像するばかり。とにかく寒いので、後ろのまっ白な山も、冬鳥でにぎやかな池も見ないで入口へまっしぐら。温室をめざす。当園には複数の温室があるが、なかでもたまねぎ型をした第一温室は国内最大級(高さ三〇メートル、直径四二メートル)で、そのかたちもうつくしい。

温室にはいると、湿度の高さが匂いでわかった。熱帯植物ドームという名のとおり、センナリバナやトックリヤシといった熱帯の植物たちが、ギアナ高地を模した岩山や滝の傍で枝葉を伸ばしている。背の高いダイオウヤシを根元から見上げていくと、その先は温室の天井だ。バショウの大きな葉は光さえ遮り、地面は暗い。生命感のあるドーム内の植物からは観賞用の花とは全くちがう強い力が発せられているようで、気圧される。めずらしいバオバブの木を見上げる

のも朦朧としてきて、次の第二温室に向かう。アザレア展がひらかれていた。昭和初期、東洋の花園といわれた新潟。当園が位置する秋葉区は国内有数の花卉生産地で、アザレアは日本一の生産量という。室内に集められていたのは約一〇〇品種一〇〇〇株にのぼる。温室内ではアザレアにかこまれる奥様の写真を撮る男性の姿あり、この品種がきれいだと話し合う親子連れあり、ベンチに腰をおろし、アザレアと外の冬景色をゆつたりと眺めるご夫婦あり…と皆さんそれぞれ好きな場所に移動し、居心地のいいところをみつけ楽しんでいた。

植物は、移動することができない。与えられた環境で生き抜くことが絶対のものとなったとき、自身の形を変化させて適応する。観賞用の花にはない野生の植物の力がよほど印象的だったのか、その夜は大きな大きな熱帯植物の夢をみた。(菅真理子)



住所 / 〒956-0845 新潟市秋葉区金津 186
 電話 / 0250-24-6465
 開館 / 9:30 ~ 16:30 (入館 16:00 まで)
 休館 / 月曜 (月曜が祝日の場合は火曜)
 温室入館料 / 600 円

「訂正」前号の新潟ぶらりに転載の俳句「白き」は「大さ」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

●お客様の『リレーエッセイ』

私の趣味

須藤昭子

(青森県・五所川原市)

私にはいろいろな趣味がある。読書、パッチワーク、水彩画、この三つがベストスリーとなっている。

読書については、三十代初めの頃、新聞の連載記事を読んでいるうちに、一冊の本と出会い、それ以来ジャンルを問わない読書が趣味となった。本から得る知識、感動は自分の教養を高める良きタミシ剤である。「戦禍の語部」に始まり、愛新覺羅浩著の「流転の王妃の昭和史」、五木寛之の「朱鷺の墓」など、昼は仕事、帰宅後は家事に追われながら唯一、ふとんの中に入ってから読書時間であるため何日もかかって読んだものである。どちらかと言えば、ノンフィクションが好きで、子供の頃遊んだ友人が北朝鮮に帰国したこともあり、北朝鮮に関した本も何冊も読破した。昨年から東日本大震災の手記等を読むことが多くなった。いくつになっても、読みたい本を手にした時の高揚感は特別なものがある。最近手にした本は「日本の七十二候を楽しむ」である。これからの生活に大いに役立ちそうな一冊だ。

パッチワークは三十代後半に出会った。小さな布を何枚も繋ぎ合わせる芸術的センスの求められるものであるが、針を持つということとは、子供の頃から母の針仕事を日常的に見ていたので何の違和感

もなく始められた。いざ始めてみると、当時はパッチワーク用の布が少なく、色合わせに苦労し何度も挫折しそうになった。その悩んでいた頃に、素晴らしいパッチワーク作家に出会い、ようやく自分の目標とする作品を作れるようになり、今に至っている。その恩人とも言える作家は福岡市を拠点に活動し、地元でシヨップ兼ギャラリーもあり、日本国中からファンが訪れている。私も長い間、作家のシヨップに出かけたいと夢見ていたが、青森から福岡は遠過ぎて決心がつかずにいた。しかし、夢諦められず、夫を同行し飛行機を乗り継ぎ福岡行きを決行して満足した。作家が今は存在しない、東京有楽町そごうデパートで開催した作品展に一人で上京し、鑑賞出来たことも良き思い出となって心に残っている。これからもパッチワークは大切にしていきたい趣味である。

昨年、定年退職を迎えて、水彩画も趣味に加わった。水彩画を描きたいと思ったのは、子供の絵を淡い色彩で描く画家の絵に魅了され自分でも描いてみたいとの思いを持ち続けていたからである。市内で私設美術館を運営する画家の教室へ通うことになり十ヶ月。絵の世界もなかなか奥が深いし、毎回悩みながら描いているが、自由に思いのまま描かせてくれるので難しいながらも楽しく学んでいる。三月には教室の生徒の作品展も開催することと、それを励みに絵筆を奮っている。水彩画も孫たちに教えられるくらい上達したいと思っている。趣味とは、「物事から感じ取られる、深い味わい」と言われる。これからの人生を潤してくれる心豊かな趣味の出会いに感謝しながら、大いに励みたいと思う昨今である。

滋味しみじみ◎◎◎

四国、高松の讃岐うどん



森 俊彦様 (神奈川県・横浜市)

二十年前、高松で全国の研究会に出席したとき、家内も同道した。空港から、宿のホテルに向かうハイヤーの中で、家内は、高松の名物料理を問うたら、運ちゃんは、「澤山あります。充分に楽しんで下さい。詳しくは、宿で聞いて下さい」であった。

夕刻、6時、ホテルを出て夕食を探したら、うどん屋があった。うどんに目がない家内に引っぱりこまれて出された「うどん」に二人ともビックリした。うまいのだ。「今まで随分食べたけれど、こんなにうまいうどんは初めてですよ」と家内。そして二人でおかわりをした上、明日から、食事は朝、昼、晩ともこの店のうどんにしましょう、と爆弾宣言。私の返事を聞きもしないで、店の小父さんとこの話を決めてしまった。確かにうまいから私も賛成して、高松投宿五日間中の食事は三回ともここにした。この店は、「讃岐うどん」の高松の元祖の店だという。帰宅の時は、土産として「讃岐うどん」を注文した。店では、開店以来、こんなに毎食利用した客は初めてと言って割引してくれた。以後、数年にわたって、年末の贈り物は、この店のうどんであったが、今店は、移動したという。

今年一月二日、横浜市内で讃岐うどんの店を見つけ、長男家族と会食して、今は亡き家内を偲んだことであった。かけ汁の味、うどんののどごしの感触は、二十年前の高松の気分を思い出させてくれた。新春のよい夢の一刻であった。

●食に関するミニエッセイ「滋味しみじみ」の原稿を募集しています。400～500字の原稿をP16下記の宛先に封書かメールにてお送りください。勝手ながら採用の可否については、弊社に一任させていただきます。おいしいお話、大歓迎です!!

第16回日本自費出版文化賞作品を募集中

一般の人の目に触れにくい日本の自費出版物に光を当て、再評価・活性化を促進しようと実施されている自費出版文化賞。当社より出版し、受賞された作品もありますので、この機会にぜひチャレンジしてみたいはいかがでしょうか。

■応募資格／制作費用の全額または一部を著者(個人・団体)が負担し、日本国内で書かれた一般書で、製本された著書が対象。

■受付期間／2012年11月1日～2013年3月31日

■応募方法／所定の応募用紙に必要事項を記入のうえ、応募著書1冊を添えて送付。

※所定用紙はホームページからダウンロードできるほか、当社にも若干ありますのでお問い合わせください。

■申込み先／〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16 日本自費出版文化賞事務局 電話 03-5623-5411

「湯時郎」さんの川柳を募集!

締切間近!



当社に多大なるご協力をいただいている情報生産企業(株)博進堂さん内の「ぴいくらぶ」では、来年2014年版カレンダーに掲載される川柳を募集中! 優秀作品は2014年版「湯時郎」に掲載され、作者には「湯時郎」1冊がプレゼントされます。腕試しにぜひご応募ください!

■テーマ:学校 ■締切:2013年2月28日 ■応募方法:官製はがきに、郵便番号・住所・氏名・電話番号・ペンネーム(希望の方のみ)を記入のうえご応募ください。■宛て先:〒950-0807 新潟市東区木工新町378-2 博進堂「湯時郎川柳募集」係

ポストカード好評発売中! 毎回大好評いただいた当社のオリジナルポストカード(1組8枚入り500円×各季節)。今回は春バージョンのハガキを同封いたしました。お気に召されましたら、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。**

スタッフの一言

Q. バレンタインの思い出は? ※スタッフが持っているのは今年にかける思い!!です。



中1の頃、先輩に渡すチョコを悩みぬいて〇〇とメッセージ入りのものに。開けた時どう思うんだろうと、連日開けては閉じ、開けては閉じを繰り返してはため息をついてたなあ。



手作りもしたし、買ってもらった。なぜか女子だけでチョコレートフォンデュの会も催しました。誰か、私にもおいしいチョコをプリーズ!! (笑)



小学生のとき。板チョコを湯煎して違うかたちのチョコをつくる...という、ただそれだけなのに、チョコのなかにお湯が入っちゃったりなんだりと初期段階で大わらわ。結局母に助けをもとめることに。



彼氏持ちが集まって女子みんなであいわいチョコレートを作ったこと。初めてにしては美味くきれいでできて嬉しかった。渡したことより思い出に残ってます。今は自分が食べたいのを買って渡して食べてます。(笑)



20代前半、彼に「パンキンケーキがいいな」と言われ、見栄がありほぼ初めてのお菓子作り。結果、固くてナイフが入らず...沈黙。でもその彼と結婚し、今でもバレンタインが近づくといい笑い話です。



高校生まではバレンタインデーを横目で眺め、本格的にチョコレートを贈ったのは上京後。横浜のダイヤモンド地下街まで、輸入チョコを買いに行ったのが一番思い出に残っています。



私の年代は勤めていたときにバレンタインなんぞというものができ、会社の人(たち)にチョコレート+ハンカチとか靴下とか添えて、結構お金を使った気がします。娘は手作りのチョコを作っていました。



中学生時代、クラスの秀才・池田君が昼休みにチョコをもらっていた。もてない男子が「ヒューヒュー」と精一杯からかっていたっけ。今はみんなおじさんです。ファイト!



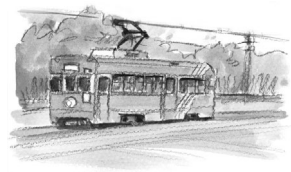
高校時代の彼へ手作りケーキを作ってあげた。どう?と聞いたら、「ん...固い、けど食べれる」ですって。以後、手作りのチョコやケーキなどは作らないと決めました。



1歳6ヶ月になりました。チョコレートはまだ早い♡

●プロフィール

1983年札幌市生まれ。立命館大学法学部卒。2008年歌誌「かばん」入会。2009年第55回角川短歌賞および第27回現代短歌評論賞受賞。2012年第一歌集『さよならバグ・チルドレン』を刊行（ふらんす堂）。



詠み人の『リレーエッセイ』

直通列車

札幌の冬は寒い。そして電車の中は暑い。電車に乗ってもわざわざコートを脱いだりはしないので、みんな汗だくである。僕がいつも乗っているJRの路線は、札幌駅へと直通でつながっている。沿線には住宅地しかない、典型的な郊外路線だ。乗客の大半は通勤や通学のために札幌駅へと到着するために乗り込む。もちろん、僕もその一人だ。

最近ダイヤ改正があり、いつも乗っている便の起点駅が少し遠くへと伸びた。つまりそのぶん前より乗客が早く乗り込むことになり、朝に乗るとすでに座席が埋まっていた座れないことが多くなった。以前は確実に座れたのに、と恨めしく思う。できれば座って少しでも眠りたい。頼むから誰か降りてくれないかと獲物を狙う鷹のように待ち構えているのだが、誰も席を立たない。駅ごとに乗客は増えていくばかりで、降りる人がいない。気付けば満員電車。そうだ、そういうところなのだ。沿線にあるのは住宅地だけなので、通勤・通学客にとっては降りる用なんて何もないのだ。みんな揃って仲良く終点をめざすしかない。行き着く場所はみんな同じなのだ。

下り列車だともちろんこんなことはない。一駅ごとに少しずつ少しずつ人が減ってゆく。人が増えていくばかりの朝の上り列車。まるで高度経済成長期の日本のようだと思う。人口は増えていくものと信じてみんな疑わなかった。「豊かな都市」へ向けて誰もが一直線に進進していた。「降りる」人なんていないはずだった。そんな状況はもう過去の遺物だと思っていなければ、地方の郊外の上り列車

山田 航

新年より新しく「執筆いただくのは、角川短歌賞現代短歌評論賞を同時受賞した歌人・山田航さまです。前回まで担当いただいた千葉聡さまいわく「繊細な表現の中に若者の心情をにじませていきます。短歌界の村上春樹です」。これから3回、実に楽しみます！

には、こうしてまだ存在していた。思想ではなく、現象として。

この路線の約半分は無人駅だ。車窓には田園地帯と呼べなくもない景色が流れてゆく。サイロのそびえる牧場を過ぎたと思ったらみっしりと家の固まる住宅地へと突入していったりする。そういうところだ。そしてこれらの沿線にある風景はすべて、「降りる理由のない街並み」なのである。

大晦日の夜遅く、僕はいつもの路線の上り列車に乗った。そんな時間だから当然ガラガラだ。同じ車両にもう一人、若い女性が乗り込んだ。静かな真冬の夜を、電車は音を立てながら進んでいく。大晦日のこんな時間に乗るということとはきつと誰かと一緒に年越しをしようとしているのだろうか、その相手が恋人である可能性は高い。そう思うと彼女の無表情は、こみあげる嬉しさを抑えているかのように見える。僕も勝手に二人の新しい年明けを祝福したくなってくる。今この電車は、人口が増えていくことを幸福とする観念から解放されている。今ここに

ある幸福は、たった一人の恋人に会いに行くこと。ただそれだけがすべての、かほちゃの馬車だ。必要な人数はたった二人だけなんだ。そんなことを考えているうちに気付けば電車は札幌駅に到着し、彼女は静かに車両を降りてゆき、僕は彼女の顔を忘れた。

もう歌は出尽くし僕ら透きとおり宇宙の風に
湯ざめしてゆく
雪舟えま

2013. 2. vol.66 (2013年2月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

喜怒哀楽書房

書誌

TEL 0120-819-395

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

編集後記

以前「そわか」の法則について書いてある本があった。般若心経の最後「菩提薩婆訶」の「そわか」とは事が成るという意味だとか。神が人間の成す行為の中で好きな、掃除のそ、笑いのわ、感謝のか、だという。神様はきれい好き。「笑いは肯定し受け入れること。感謝のありがたうは人智の及ばないことが成されたときの「有り難し」。毎朝の掃除は心を入れて行おう。笑いは楽しいから笑うんじゃない、笑うから楽しくなるんだ、くらいの気持ちで笑ってみよう。とりあえず「ありがたや、ありがたや」と連呼してみようか。そんな作為的な人に神様は味方してくれないかな。どうぞよい一年を！（木戸敦子）